

東日本大震災・原発事故から四年 現在の子どもたちの生活

阿部 澄

福島県福島市 渡利学童保育きりん教室 指導員

私は、福島第一原発から六〇キロも離れているのに、当日の風の流れて放射線量が高くなり、テレビなどで注目された福島市渡利にある「渡利学童保育きりん教室」(以下、きりん教室)で勤務する指導員です。

本誌の二〇一一年一〇月号には、東日本大震災・原発事故後の、当時の福島市の学童クラブの状況を書かせていただきました*。学童保育の土台がどれほど不安定なものだったかを思い知らされた気がします。四年経つたいま、子どもたちの生活がどのように変わってきているのかをお伝えします。

* * * * *
二〇一一年は、「土・草木・昆虫などの自然物には絶対にならぬ」という約束を子どもたちとして、ほとんどの日々を室内で過ごしました。しかし、私たち指導員と保護者は、子どもたちができるだけ屋外での活動を体験させたいと考え、相談しながら毎日の

保育を行ってきました。

はじめ(二〇一二年三月から)は、除染された校庭の「まんなか」で少しだけ外遊びをしました。つきは、除染されたきりん教室の狭い敷地に出ました。ダンゴ虫とりも解禁しました。外には出たものの、かつて子ども同士が一輪車を教えあったり、陣取りで低学年がじゃんけんんで高学年を負かしてほめられたり、ときにはすり傷もつくりながら楽しんだわくわくドキドキの生活とはほど遠いものでした。

二〇一三年八月、地域の除染とあわせて、以前の遊び場だった神社の除染がようやく行われました。空間線量が下がったことを確かめ、保護者と相談のうえ、一月から恐る恐る神社で遊びはじめました。

そして二〇一四年には、積極的に神社で遊ぶようになりました。一輪車・泥だんご・おにごっこ・低学年中心のボール遊びなどを楽しみました。三年

ぶりにおままごとをしたこと、朝顔を育てて「色水をつくったこと、神社の椿の実で笛をつくったことなど、うれしい出来事でした。学童保育の生活の場のすぐ前に遊び場があり、友達と楽しそうに声が聞こえ、その顔が見えることは子どもたちの心を刺激し、つながりを広げ、深めることになりました。

* * *

しかし、取り戻せないものもあります。一つ目は地域の自然です。きりん教室は創立三五年。一貫して地域の自然のなかで子どもたちを育てたいと考えてきました。地元の人に登り、どんぐりを拾ってコマをつくったり、阿武隈川で魚を捕ったり、そりすべり、たこあげを楽しんできました。二〇一五年は「阿武隈川でそりすべり」とたこあげをした」と指導員から父母の会に相談をしました。父母からは「まだ不安がある」という声も出ましたが、放射線防護の専門家である安齋育郎先生

が線量測定をしてくださり、「短時間なら」というアドバイスもあり、一度だけそりすべりをする事ができました。しかし、「地域で遊ぶ楽しさ」を存分に感じるにはまだまだ時間がかかります。それはきりん教室だけではなく、自然と関わる保育を大事にしてきた学童保育所の共通のつらさです。

二つ目は、子どもたちの遊びや年齢の交流という宝物の喪失です。神社でみんなで遊ぶ環境が失われ、きりん教室にずっと伝わってきた生活や遊びに四年間の空白ができました。日々の努力で取り戻したいと思っても、生活がおちつかないかぎり厳しい課題です。全国の皆さんからも県外での体験学習などの支援をいただきました。しかし子どもたちの成長に欠かせないのはなにより、毎日の宿題・おやつ・友達との楽しい遊びやケンカや仲直り・指導員とのやりとりだと思っ、指導員一同、日々の保育に取り組んで

います。

* * *

そして、それらの多くを改善するうえで大きな力になるのが、二〇一四年度に策定された「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」放課後児童クラブ運営指針」だと期待しています。

そこでは、放課後児童クラブは「子どもの最善の利益」を考慮し、「子どもが安心して過ごせる生活の場」としてふさわしい環境を整えなければならない」とされており、このことは、現実とのギャップは大きいけれど、東日本大震災・原発事故を経験した(している)子どもたち・保護者・指導員の願い——災害に負けない建物、のびのび遊べる広場、研修を積み安定した身分の指導員が保護者と共に子どもたちを育てる——と重なるものだと感じています。全国の皆さんと、力をあわせていきたいと思っています。